1994年4月15日発行　1975年2月28日第3種郵便物認可
毎月1回15日発行
定価／150円
年間購読料／2,000円（送料共）

編集／緑の地球ネットワーク
Green Earth Network

大阪市港区市岡元町3丁目9-16　西建ビル（〒552）
Tel. 06-583-1719　Fax. 06-583-1739
郵便振替　大阪4-128465
COM21 通巻319号　発行/COM企画室

緑の地球
GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

●黄土高原ワーキングツアー座談会 … P 2
●南河内水と緑の会 …… p 7

村の人といっしょにリンゴの苗を植える（霊丘県下寨北小学校付属果樹園）

1994・5
25

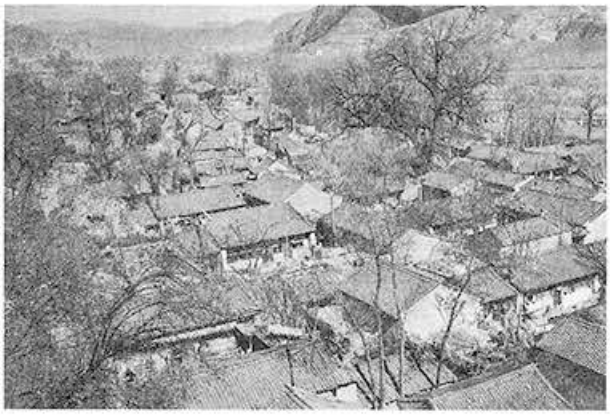
ワーキングツアー座談会

驚きとおもしろいことばかり

子どもたちといっしょに働きました

黄土高原緑化ワーキングツアーは3月24日に神戸を出発し、天津、北京をへて3月27日早朝に現地入り。前半の数日は北京在住の日本人4人の飛び入り参加があり、総勢16人に。緑化協力が一段落した4月3日の夜、若い団員を中心にホットな印象を語りあってもらいました（大同にて）。

【参加者】　（50音順・敬称略）
桶田美保（学生）
小沢千代子（ツアーコンダクター）
嶋田光雄（学生）
杉村正彦（学生）
冨沢勇武（弟・学生）
冨沢隆思（兄・学生）
中井美和子（学生）
高見邦雄（GEN世話人）



黄土色だけの冬枯れの村

メンバーたちにとって黄土高原で目にする光景は驚きの連続。まずはその第一印象から。

冨沢（弟）　広いですね。北京はすごい人だったけど、農村にくるとそんなでもない。浸食谷なんかほんとにすさまじくて、驚きどおしでした。

中井　まだ夢のなかですよ。日本に帰っても、あれはなんだったんだろうと思いつづけるでしょう。最初に大同で感じたのは、石炭による空気の悪さ。渾源にいったら、砂ぼこりがすごかった。

杉村　全体の光景が単色だった。黄土高原だから黄土色であたりまえなんだろうけど、ほんとに一色だけ。町では赤い服とか着てる人もいるけど、色彩が乏しい。

冨沢（兄）　ぼくも色の少なさにびっくり。緑なんてほとんどない。ずっと昔の世界にきた気がした。

嶋田　時季も悪かったんだろうな。冬枯れだったから。

中井　土がサラサラの砂でしょ、草が生えているのが不思議なくらい。木が育っているのをみて、信じられなかった。最初にあれを植えた人はなんて勇気があったんだろうなんて……。

冨沢（弟）　浸食谷の底に木が植わってたでしょ。土が肥えてて、水気もあるっていうけど、最初はびっくりしちゃった。垂直の壁にだけ生える木もあるっていうし……。

冨沢（兄）　雨がふると谷底は濁流になるそうだけど、どんなだろうかな。

中井　流れる木もあるだろうけど、けっこう育ってたね。

冨沢（弟）　ぼくは沙漠のようなイメージもってたんだけど、植林にずいぶん力をいれてる。道や水路の両側のポプラ並木がよく育ってた。

どの村でも農家を訪ね、昼食もごちそうになった。かいまみた農村の生活で、若い団員がいちばん強く感じたのは……。

嶋田　衛生観念のことかな。いろんな家畜を飼ってて、人が捨てたものがすぐエサになる。それはひとつのサイクルでいいんだけど、ビニールなんかの人工物も同じように捨ててる。工場なんかも、汚水をそのまま流してる。このままだと大問題でしょう。

杉村　衛生観念なんかもったら、ここじゃ暮らしていけないよ。手が汚れても、洗う水がないんだから。ぼくらはウンコ、ションベンは汚いって観念がしみついてるし、周囲から排除してるけど、ここではすぐわきにある。服装なんかは目からしか入らないけど、臭いもあるし、ビチャッとくる。五感すべてからくるからやっぱり強烈。

小沢　人や家畜の糞尿も有機肥料として使っているからですよ。

桶田　私が思ったのは、みんないつ仕事してるのかなってこと。(爆笑)

中井　日本は都会はストレス社会で、農村も問題だらけ。イヌ、ブタ、ニワトリが走り回っている中国の農村は、のんびりしてて、おだやかだなあと。

冨沢（弟）　町なかをブタが歩いてるもんね。イヌもブタもなぜか黒いのが多かったけど。

桶田　農家も訪問したけど、きのうはお膳立てがしてあって、ちょっとがっかり。夕飯をどこかで勝手に食べといでという感じで、自由に行けたらいいなあ。

冨沢（弟）　高見さんなんかそうやってるでしょ。でもちょっとは中国語できないとね。

小沢　どこの家にいっても、ごはん食べてけって誘われるでしょ。手真似や身振りでけっこうやれるわよ。

中井　それはそうだけど、たいせつな一言が言えなかったりして。

小沢　若い人はどこに行っても大歓迎だったね。中国の人たちが若い人のとこに集まっていくんで、うらやましかったよ。

冨沢（弟）　むこうも子供がかわいくて、ちっちゃい子が。

嶋田　すねたガキなんていなかったよね。(笑い)

小沢　中学・高校くらいの子をみなかったね。小さい子と大人だけで。

高見　成熟のスピードと関係あるかもしれない。中学生くらいに見える子がじつは18～20歳なんてことがあるんですよ。結婚して子供が生まれると、アッというまに老けちゃうけど。

最初のしごとはＧＥＮの宿泊所のヤオトン（窰洞）づくり。４室の予定だったが、渾源県から予算が追加され、計７室の大がかりなものに。爆竹をならし、地元の風習にしたがって天の神・地の神に祈ったあと、レンガつみがはじまった。

小沢　水をくんで、レンガにかけて、そのレンガを運んで、砂をふるって、セメントを練って、それを運んで……と、いろんなことしましたね。

冨沢（弟）　あんなでかいのを２人の職人さんがつむんでしょ。村の人がたくさんいたけど、笑って見てるだけで手伝わない。技術が必要なのかな？

杉村　あれは職人のしごとだよ。水くみやレンガ運びはいいけど、レンガつみなんか、素人に手を出されたら、日本だって職人はいやがるでしょ。

冨沢（兄）レンガ運びをぼくらがどんどんやったから、職人さんは休むヒマもなかった。

桶田　浅く広くという感じで、あれはなにかあっけなかったな。

高見　基礎のとこだけで、形になるとこまでいかなかったから。

嶋田　あのペースでよかったじゃないですか。村の人が見守るなかで、すこしずつできていく。おたがいの関係のためにいいと思うんですよ。１日だけのお祭りで終わるよりははるかに。

植樹のしごとも合計５か所で、思うぞんぶんやった。これまでのワーキングツアーの不満を吹き飛ばすように。通り過ぎるだけではわからないことがいっしょに働くなかでみえてくる。小学校付属果樹園で、子供といっしょに労働したのがとくに印象的だった。

冨沢（兄）　村に行くと、子供からお年寄りまで、村中の人が総出で出迎えてくれる。うれしかったね。太鼓とドラ、爆竹の歓迎がものすごかった。

冨沢（弟）生活は貧しいけど、子どもの表情は明るい。こっちが寄っていくと、村の人はちょっと下がるけど、子どもたちはすぐうちとけて。

冨沢（兄）　小学校を見学したとき、子どもたちが歌をうたってくれたでしょ、外にいても聞こえるくらい大きな声で……。（全員: あれは感動的だったねー）

小沢　大きな声で、腹の底からね。あの表情には感動しましたねえ。

嶋田　全身でしぼりだすような声だった。

冨沢（兄）　はじめのとこで子どもといっしょに穴を掘ったでしょ。ずっと同じ子と組んだけど、汗だくになってすごくがんばる。うれしかったな。

冨沢（弟）　日本からきてくれてるのに、休んじゃいけないと思ったんじゃないかな。だからこっちも休めない。どんどん穴を掘って、最後には２人とも疲れきっちゃった。子どもは一生懸命なのに、女の大人はさぼってたな。

小沢　リンゴ苗に水やるとき、ちっちゃな子どもが、お湯飲み、洗面器、やかん、おなべ……、いろんなものもってきてたでしょ。先生にいわれて、家にあるものもってきたんでしょうね。ほんとにかわいくて、おもしろかった。あと、農村で男の子をほしがる事情がよくわかりましたね。女の子は洗面器か湯飲みだけど、10歳くらいでも男の子は大きなバケツをひっくりかえして水をかける。もう労働力ですよ。

中井　うん、子どもにはげまされた。でも、大人は見てるだけの人がいましたね。ふだんは働くけど、珍しいのがきたから、見て楽しんでたのかな。それともいつもなのかな？

渾源県長条村でのこと。しごとを終えたあと、子どもたちが私たちの乗ってきたバスを覗きこんで離れない。どの子も車に乗ったことがないそうだ。超満員にバスに乗せて、学校まで走らせてもらった……。

冨沢（兄）　大喜びだったね。（全員：そうそう）

小沢　ほんとに、バスに乗せてどこかにつれてってあげたいと思った。

嶋田　ああいう子の家にもテレビがついて、大同にもないような都会の生活を流すんでしょ。それをどうみるのかな。テレビのなかだけの世界で、現実のものと思わないのかな。それとも現実の中国にある世界とみるのかな。すごいギャップを感じます。

小沢　私たちはあれで終わりだけど、あの子たちはまだまだつづく。私たちは帰ればお湯にも入れるけど、あの子たちは入れない。あそこから逃れられないと思うと、なにか申しわけない気がします。早くリンゴが実って、少しでも役立てばいいなって。あの子たちも一生懸命だから、ちょっとでもお手伝いしたいな。

中井　学校では、日本とくらべてむずかしい勉強をしてましたね。円周率の計算とか。

嶋田　漢字もたくさん覚えないとやっていけない。

冨沢（兄）　中学に行く子は少ないから、小学校でみんなやる。

小沢　霊丘県の下寨北村では１年から５年まで１つの教室で複式授業でしたね。

高見　都市は小学校６年制だけど、農村は５年制が多い。ひとつの県でも５年制の村と６年制の村がある。就学率も100%近いところもあれば、半分くらいのところもある。教育熱心な村

村人が見守る中で、レンガがつまれる。

火の気のないオンドルで学ぶ１年生たち

かそうでないかでかなりちがいます。

小沢　道で聞いたら、学校に行ってないという子がいましたよ。きょうだいを聞いたら、３人くらいという子が多かったですね。

嶋田　戸数にくらべて子どもの数が多いですね。学校で使っているノートがオブラートみたいに薄くて、透けてみえるほど。日本でも、書きっぱなしで家に帰って復習なんかしないことが多いから、上質の紙なんか必要ない。中国の子をみて、かわいそうと思うか、ぼくらが無駄な社会に生きているか、そこが考えどころだと思います。

急速に拡大しつつあるＧＥＮの緑化協力。１つの地球環境林でも最低で５ha、広いところは40～80haもある。その広がりをどう受けとめたかな？

嶋田　日本での活動に参加してＧＥＮは小さなグループだと思ってたけど、中国にくると県長はじめ幹部がたくさんでてきて、村ぐるみの歓迎がある。頼りにされているんだなとびっくりしました。

中井　県の林業局長なんて地位のある人だろうけど、服を泥だらけにしてまっ先に立って木を植える。あれはうれしかったですね。

小沢　木を１本育てるのにすごく手間がかかるんですね。最初に穴を掘ったとき、土が凍結してた。で、30～40cmも掘ったら、よく掘れた、いいよ、いいよとほめられたのに、つぎにいったら直径も深さも70cmは掘ってある。またちょっと掘って、肥料をいれて、かきまぜて、植えつけて、踏み固めて、水をやって、ビニールをかけて、土で押さえる。そのあと何度も見回って、それでも枯れるものがでる。これまで無造作に木を切ったりしてたけど、簡単には切れないと思いました。

中井　きょうのアンズなんか、80haに３万本以上植えるんでしょ。去年の秋に穴を掘ってあったけど、機械なんかなくて、ぜんぶ人がスコップで掘ってる。あれはすごい！

小沢　去年植えた松の苗に、寒さと乾燥から守るため、土がかぶせてある。掘ってごらんといわれて、土をのけたら、ほんとに緑の松があるじゃないですか。いとしかったですよ。よく生きていてくれたね、はやく大きくなってねって話しかけました。

嶋田　あの一帯にはかなり木があったでしょ。ずいぶん植えてた。それでも砂ぼこりがすごい。こんなに植えてもだめなのか、ってなったらどうでしょう。先のこと考えて、それでもまだ植えつづけてくれるかな。

冨沢（弟）　ぼくが農民の立場なら、５～10年先にはお金になるっていわれても、目先のことに走っちゃうな。

中井　地球環境のためとか未来のためとかいわれても、とにかく日々の生活に困る状態なんだからね。

高見　結果がでるまでは半信半疑だからね。花が咲いて実がなって、そこまでいけば人のみる目も変わるだろうけど。松なんかでも植えて５～６年めからの成長はかなり速いから、とにかくそこにたどりつかなくっちゃ。

冨沢（弟）　そこの見通しがしごとぶりにもでるんでしょうね。いっしょに組んで植えたおじさん、ものすごくがんばるんですよ。もうやめようかなと思っても、その人はどんどん先に行っちゃう。無口な人なんだけど、すごかった。

中井　うん、あの人には感動した。

冨沢（弟）　でも、そういう人はそんなに多くない。あんなにがんばる人がもっと多くなるといいんだけど。

冨沢（兄）　政府の人でも、服が汚れても平気で、根を一本一本広げて、ていねいに植える人もいたけど、パッと穴をほって、苗を押しこんで、それでおしまい、って人もいた。

中井　写真をとるのに夢中で、植えるまねだけして、それで終わり。苗だって貴重なんだから、あれじゃあ困っちゃう。最初はていねいでも、時間がたつにつれてザツになる、って傾向があるよね。肥料も最初はいれてるけど、途中から、いいよ、いいよなんてことになって。

嶋田　こっちは旅費まで使って、植えようと決意していった人ばかりじゃない。でも、むこうは村の人が総出、いろんなタイプがいてあたりまえ、といえば、それはそうだな。

中井　いくらもらってきてるんだって聞かれた人もいるよ。いや、自分で旅費をだしてきてると答えたら、信じられないって顔してたって。

嶋田　食べるのがやっとの人には、想像もできないんでしょうね。

いつ働いてるのかな？なんて思える中国の農村だけど、いつのまにか信じられない面積の植林がすすんでいる。そのナゾはつぎに回して、最後にひとことずつ。

杉村　驚きの連続でまだちゃんと話せないけど、ほんとにおもしろかった。貧乏って話もでたけど、ぼくは正直な

子供たちはほんとに一生懸命はたらいた

とこ、よくわからない。小さいときから家にテレビ、冷蔵庫、自転車なんかそろってたし、車はなかったけどバスにはすぐ乗れる。前の道はアスファルト。貧乏の体験が一時期でもあれば、そこにひきつけて想像できるだろうけど、その前提がない。貧乏なんて、見学してわかるものでもないんでしょうし。

中井　不自由っていえば不自由でしたよ。とくに水がそうで、外から帰って手を洗おうと思っても水がでない。飲もうと思うと、こわごわですし。いまの日本は清潔ってことが1つのキーワードでしょ。ハミガキも抗菌酵素入りなんてのがあるし、便器クリーナーもある。でも、清潔であるために、あくせく働いてストレスためてるでしょ。地球の一員というと、いままできれいなこととして聞こえてたけど、とても人間臭いことに思えてきた。その体験ができてほんとによかった。

桶田　学校で勉強もできなくて、せまい村で一生くらして、そこで死んでいくというのは、いまの私にはすごくこわいことです。こんど中国にきて疑問ばかりがふくらんでますよ。わからないことばかり。

嶋田　日本とはまるでちがうとこだから、なんでも刺激になっておもしろかった。停電だって、断水だって、一時の体験としてはほんとにおもしろい。でも、ここで暮らし、それを日常としてる人はちがうでしょうね。そこにテレビや新聞が外の世界を伝える。ぼくらもなにかを外からもちこむ。外の世界を知ることが、村を変える要因になると思うんです。それが都市の生活の便利さだけだったら、いいとこだけだったら、やはり問題でしょうね。そこのところを村の人といっしょに考える必要がでてくると思いますね。

作業のあと子供たちといっしょに

小沢　私を中国にひきつけたのは、中国人の笑顔なんですね。ところが最近は奥地にいかないと、そういう笑顔に出会えなくなった。今回は農家を訪ねて、その笑顔に出会えましたよ。目が輝いてて、意欲も十分だった。農民のよさが顔にあらわれてて、ああ、いい笑顔だなあって思ったんです。家を訪ねたとたんに夕飯を食べてけ、食べてけって誘ってくれたんです。またこいって。緑化ってすごくいいことだし、中国の人たちも求めてるでしょ。今回の体験を自分のしごとにもプラスにしたいと思います。

黄土高原ワーキングツアー 報告会のお知らせ

3月24日「燕京号」で出発した黄土高原ワーキングツアーの一行は、4月6日（一部は10日）無事帰ってきました。今までのツアーでは「もっと作業がしたい」という声が多かったのですが、今回はその教訓が生かされ作業のスケジュールはぎっしり、「また作業？」といささかうんざりの人もいたとか。ヤオトンの起工式や、小学校付属果樹園での子どもたちとの植樹の体験など、話はつきそうにありません。ビデオの上映も予定していますので、ぜひご参加ください。

日　時：4月25日　18時30分～21時
場　所：大阪市立弁天町市民学習センター（ＯＲＣ２番街７Ｆ）
　　ＪＲ環状線、地下鉄中央線「弁天町」駅からすぐ
参加費：500円

広げよう緑のネットワーク 会報購読のお願い

緑の地球ネットワークが昨年4月11日、結成総会を開いて正式発足してから早いもので1年がたちました。黄土高原の緑化協力は、みなさんの緑化基金や各種助成のおかげもあり、着実かつ驚くほどのスピードで進んでいます。ネパール・ムスタン地方サウル村での協力もいよいよ始まりました。

広がる海外での緑化協力を支えるのはやはり会員のみなさんです。現在の会員数は発足時から大きな変動もなく400人弱、このあたりで飛躍が望まれます。そこで会員・会報購読者のみなさんにお願いです。「環境問題に関心はあるけど何をしたらいいかわからない」身近にそんな人がいたら、会報の購読をすすめてあげてください。まず、会報をとおしてＧＥＮを知ってもらいたい。そしてアジアに、地球に緑を取り戻す仲間を増やしましょう。

●会報購読料（1年分・送料含む）　2,000円
●会費（1口1年分・購読料含む）

一般会員	12,000円	ジュニア会員(小中学生)	1,000円
家族会員(2人めから)	6,000円	団体会員	12,000円
学生会員(高校生以上)	3,000円	賛助会員	100,000円

原生林を守る世界の動き
～アメリカでは～

昨年の秋、大阪でも開かれた“エスニックミュージックコンサート'93”のことを覚えている人も多いと思います。あの舞台で、また大阪実行委員会のパンフレットで『シンキオンの森』のことが語られました。私たちの“北海道・アイヌモシリにおけるナショナル・トラスト運動”とあい通じるところがあるので、著者の許可をえてパンフレットから紹介します。（武田繁典）

シンキオン原生地回復連合（ITSWC）

シンキオンの森

アメリカ合衆国の州名や河川、山岳や地名の多くが先住民（アメリカ・インディアン）の言葉にちなんでいることはあまりにも名高い。ミズーリ（大いなる沼地）やミシシッピ（大いなる水）は有名だが、ミネソタ、マイアミ、ヒューロン、アイオワ、ネブラスカ、アイダホ、ダコタ、ポトマクなど、地図を広げなくても次々思い浮かぶ。

「シンキオン」は聞きなれないが、先住民シンキオン部族が、かつて祭場、霊場、薬草の採集などに使った聖地である。

シンキオンは、もともと先住民の言葉で「ウナギのいる川の南の分岐点」を意味し、サンフランシスコから北へ約350km、メンドチーノ郡の中心部から車で20分ほどの所にある。シンキオン部族はその地で、8000年前から豊かなレッド・ウッド（アメリカスギ）の原生林の恵みを受けて暮らしてきた。しかし、19世紀以降、白人による過剰伐採が続き、とくに1950年代から80年代にかけて、種子から芽が出て大木となったいわゆる一次世代の木のうち97%が切られてしまったのである。

この地に、全米初の複数先住民管理による「シンキオン先住民管理公園」を建設し、開発によって絶滅一歩手前まで追い込まれた原生林を守ろうとしているのが「シンキオン原生地回復連合」（The InterTribal Sinkyone Wilderness Council）である。この組織は、北カリフォルニアの先住民10部族が集まって1987年に結成された。

その2年前、地元の環境保護団体である「環境保護情報センター(EPIC)」が、伐採会社を相手取って過剰伐採によるシンキオンの土地破壊の責任を追求した裁判を起こした。「EPIC・ジョンソン訴訟」として知られるが、非先住民と先住民が広く連帯して闘ったこの環境保護訴訟は、2年にわたる裁判のすえ勝訴、1987年、カリフォルニア公園リクレイション協議会、公共地信託、州沿岸局、レッドウッドを救う会が7100エーカーの土地をその会社から買い取ることに成功した。

うち3300エーカーは、州立シンキオン自然公園に合併されたが、3800エーカーは公共地信託にまかされ、州沿岸局の運営によって商業的伐採もふくむ“多目的利用”の可能性がでてきたのである。訴訟以降の土地利用が、先住民族の同意なしに決められたことへの問題提起として、かつては野生動物の宝庫でもあった祖先の土地を回復するために複数部族が連帯してこの連合体を結成した。

彼らの最終目標は、先住民の伝統的な土地利用の実践と地球的規模の環境回復の精神を統合することにある。そこには、文化遺産保存の一環として先住民の伝統的集落が建てられ、訪問者が自由に先住民族の文化や伝統について学ぶことのできる教育施設も設置される予定である。しかし、それを実現するためには、土地の名義変更料120万ドルが必要であり、目下、資金獲得のため広く協力を求めている。

連絡先：The InterTribal Sinkyone Wilderness Council
住所　：190 Ford Road #333 Ukiah CA 95482 U.S.A.
電話　：(707)485-8744

GEN自然と親しむ会

新緑の植物園を歩く

あっという間に桜も散ってしまい、木々の若葉が美しい頃となりました。今回の「自然と親しむ会」では、大阪市立大学理学部付属植物園を訪れ、立花吉茂先生に植物のお話をいろいろうかがうことにしました。

日　時：5月15日（日）午前10時～午後3時　●雨天決行
場　所：大阪市立大学理学部付属植物園
集　合：京阪電鉄交野線「私市（きさいち）」駅前午前10時
京阪「淀屋橋」駅
↓　26分
「枚方市」駅
↓　14分
「私市」駅
持ち物：弁当、水筒
（植物園内には何もありません）
参加費：大人700円　小人200円
（保険料含む・植物園入園料350円（中学生以下は無料）は別）
講　師：立花吉茂先生（花園大学教授、大阪市咲くやこの花館技術顧問）
●参加申し込みは、5月10日までにGEN事務所まで。
（TEL. 06-583-1719）

土佐小夏をどうぞ

小夏は、土佐を代表する果物のひとつで、その上品な味と香りはたくさんの人に愛されています。高知県で無農薬・低農薬、有機栽培の農業を営む田中さんから、案内が届きました。

●小夏（低農薬有機栽培）
LM混　5kg　3,800円
S・2S混　5kg　3,300円
※送料別途（関西は620円）
出荷は4月10日から5月20日迄。
★ご注文は～
〒781-74　高知県安芸郡東洋町甲浦
田中隆一さんまで
TEL.・FAX 08872-9-2500
売上から一部をカンパして頂いていますので、“GENの紹介”とひとこと添えてご注文ください。

都市と山をつなぐ炭焼き体験

南河内・水と緑の会　平尾 克之

3月の「自然と親しむ会・炭焼き体験」は、3月12日があいにくの雨で、翌13日に行われたため、人数が減ってちょっとさびしかったのですが、参加者はブタ汁を3杯食べたとご満悦でした。この「炭焼き体験」でお世話になった「南河内・水と緑の会」の紹介です。

この窯で炭を焼きました（3月13日）

大阪の南、葛城山のふもと河南町では、40年位前、たくさんの炭窯があったそうだ。炭焼きの時期になると山のあちこちで煙が上っていた。今では、炭焼きを職としている人はほとんどいない。

河南町の持尾で炭焼きをしようという話が持ち上がったのは6年前のことだった。炭焼きについては、地元で有機農業をしている久門太郎兵衛さんに場所の提供から技術指導まで全てしてもらって現実の話となり、その頃できたばかりだった『南河内・水と緑の会』が会の行事として取り組んだ。

本来、自然環境について考えるグループである『南河内・水と緑の会』が、どうして木を伐採する炭焼きをするのか不思議に思われるかもしれないが、炭材となるコナラやクヌギは、切っても切り株から芽が出て、再び大きくなる。10年サイクルぐらいで切っていくことで山の雑木林は荒れずに守られてきた。杉やヒノキの単一林に比べて、コナラやクヌギの落葉樹の雑木林は、動物や植物も圧倒的に多い。山と生活とのつながりが少なくなった今では、こういった山の価値は忘れられ、ゴルフ場とか、産業廃棄物の捨て場とかに姿をかえている。

環境問題を語るとき、どうしても言葉だけが先行して頭でっかちになりがちだが、ぼくたちはこんな体験を通して、言葉だけでは学べないものを自分に吸収していこうとしている。山を知り、自然を知り、自然の不便さやしんどさを知りながら、自然の豊かさや楽しさも自分たちの中に刻みつけておきたいと思っている。

炭は、料理や水の浄化にと見直されているが、もう少し進んで現在の環境を破壊して成り立っている異常な豊かさも見直されたらと願い、毎年炭を焼いている。

山西省の自然

石原忠一
（92年緑化協力団団長）

（19）褐馬鶏（ミミキジ）

山西省の野鳥は約270種が記録されています。これらの中で山西省がふるさとで、ほとんど特産のミミキジは、山西省の鳥として大切にされ、国家保護鳥に指定されています。

1972年のストックホルムでの国連人間環境会議の勧告をうけて、'73年3月3日に採択された〈絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約－通称ワシントン条約〉、附属第Ⅰ（絶滅のおそれのあるもの）の適用をうけて厳重な規制がおこなわれています。

現在標高1,800～3,500mの山地の灌木林や岩の多い草地にいて、主に地上で採食し、夜は樹上の安全な場所で眠る性質があります。全長約100cm、雌雄同色。

地球上には、原生の鳥が25目約9000種が確認されているのですが、キジ目のシチメンチョウや、クジャクや、鶏の原種のヤケイなどをふくむキジ科の鳥は63属212種が生存し、古来狩猟の対象にされたり、生息場所の森林の伐採等で追いつめられ、保護が必要です。特にミミキジ属（Crossoptilon）の仲間3種類は、いずれも中国特産種です。

原産地で野生の状態で、地域の生態系ぐるみで保全することがもとめられ、1981年以降、関帝林区や芦芽山に自然保護区が設けられています。

幸い、動物園に飼育されているミミキジの増殖（一腹の卵数5～8個、抱卵26～27日）や人口孵化が成功しており、天王寺動物園でも元気にケージの中で生活しています。

写真は、'94年4月6日、大阪市職建設局支部の大東弘さんと、獣医師の神崎安昭さんに案内していただいて撮影したものです。

私の本棚

高速増殖炉もんじゅ

巨大核技術の夢と現実

小林圭二著

七つ森書館発行/定価3090円

新井勝俊（大学生）

高速増殖炉「もんじゅ」とプルトニウム。そこには、我々が避けて通れない問題が凝縮されている。猛毒プルトニウムが及ぼす影響、先進国が開発から撤退した、技術的危険性と不経済性。プルトニウム秘密社会……。

「燃料が増殖する」「エネルギー問題の解決」、このような夢をふりまき、50年も前から構想され、研究された高速増殖炉。その「夢」を打ち砕いたものは何だったのか。

筆者はこの著書の中で、「もんじゅ」の問題点を、だれにも分かりやすく説明している。日本に住む人間すべてを死の灰で覆う危険性。暴走しやすい炉心。ナトリウム爆発・火災の危険性。地震に対するもろさ。しかし、危険性を解説する前に「夢」は砕かれる。すなわち、高速増殖炉サイクルでは、リサイクル過程でロスが生じるため、燃料が本当に増えるのかは不明で、エネルギー源として成立するかさえ疑わしいのだ。

筆者の主張は、危険性、不経済性のみに終わらない。大量消費文明と自然破壊、南北問題等々。そこに潜む問題を「科学技術教の盲信」とたとえている。説かれるままにエネルギー不足に不安を抱き、教祖（国）にすがる信者たち。「いずれ科学技術が解決する」という「念仏」を唱える信者には、今も苦しむ人びとの声は聞こえず、自分の身に迫る危険は感じ取れない。

差し迫った、危険な原発「もんじゅ」の問題は、この「科学技術教」から脱退し、さまざまの問題を見つめるための一つの手掛かりでもある。筆者の警鐘は、私の心に強く響く。

編集後記

ワーキングツアーの座談会、いかがでしたか。私が行った夏は一面畑の緑だったのに、季節で全然違うんですね。

ネパールの記事は、佐野さんの都合でお休みです。次号をお楽しみに。

毎回編集のお手伝いを、と頼みながら、とにかくある程度自分でマックをわからないことには人にも説明できないと気付き、あちこちにご迷惑をかけながら何とかできた…みたいです。ご親切にお手伝いを申し出て下さったみなさん、次回からよろしくお願いします。とりあえず今はこの肩こりをどうにかしたいぞ。（東川）

熱帯林を学ぼう

ウータン主催連続講座のご案内

熱帯林を守るための活動を続けている“ウータン・森と生活を考える会”が、熱帯林のことを学び、森を残すためにはどうすればいいかをいっしょに考える『熱帯林連続講座－未来に森を残すために－』を開講します。

【内容】

（1）4月16日（土）18:00～21:00
「熱帯林って何だ？」
［お話］荒川共生さん

（2）5月21日（土）18:00～21:00
「熱帯林の生態」
［お話］渡辺弘之さん

（3）6月4日（土）18:00～21:00
「先住民のくらしと熱帯林業」
［お話］井上真さん

（4）7月10日（日）13:00～16:00
「なぜ、熱帯林を守るのか？」
［お話］猪俣栄一さん

【場所】

アピオ大阪（JR環状線・地下鉄中央線「森之宮」駅下車西へ1分）
TEL.06-941-6332

【参加費】

800円（各講座とも。申込みの必要はありません。1回だけの参加もできます）

●ウータン・森と生活を考える会
TEL.06-372-1561